

アメリカ一九三〇年代の社会運動と知識人の問題 (下)

矢 澤 修 次 郎

目次

I アメリカ三〇年代社会運動の地平

〔A〕 基礎視角について

〔B〕 ジョージ・ローウィックのニュー・ディール論―基

本的視座の設定

〔C〕 労働知識人の創出 (以上98巻1号)

II アメリカ三〇年代知識人の諸類型

〔A〕 政治的左翼―共産党を中心として―

〔B〕 諸セクト

〔C〕 CIO運動

〔D〕 プロレタリア文学運動

〔E〕 結びにかえて―知識人の疎外 (以上本号)

II アメリカ三〇年代知識人の諸類型

〔A〕 政治的左翼―共産党を中心として

かつてアメリカ共産党を党員の社会的構成に着目するという視角から検討したことのあるN・グレイザーは、その著作において次のようなことを明らかにした。すなわち、二〇年代の共産党が一定の移民集団のなかの労働者階級分子を主体としたものであったのに対して、三〇年代の共産党は、アメリカ生れの労働者に浸透し、また多くの中産階級メンバーを持ち、更には黒人大衆をひきつけて、ある程度社会的孤立を克服しかけたのだったとわれわれの当面の課題は、この事実をふまえながら、アメリカ共産党が、どのようにしてアメリカの労働者をつかみ、また党が如何にして「中産階級化」したかを理解すると同時に、そうしたことの社会的意味や帰結を解明してゆくことである。

一九二〇年代のアメリカ共産党は、I・W・W (Industrial Workers of World) 出身者や少数の知識人党员という形でアメリカ生れの党员を擁したとはいえ、アメリカ生れの党员の数は全党員の一〇%以下だったと言われる。そこで、党は何とかしてアメリカ生れの労働者を党の隊列に加えようと一貫した努力を払っていた。実際、党は、工場に不拔の基盤を持つ党を志向し、そのための指導を強化したのである。だがしかし、当初、この方向での党の努力は、結実しなかった。というのは、外国語を話す労働者党员は、労働者としてのみずからの役割を重視することができず、また、自分達の活動を党の中心課題と結びつけることがなかったからである。その結果、アメリカ共産党は、三〇年代の最初の数年間は、社会的孤立を解消することができなかった。だが、恐慌の深化は、社会的混乱や貧困に悩む人びとを共産党に引きつけ、さらには人民戦線の提唱が党のアピールの範囲をさらに広め、党は徐々に社会的孤立から脱して、一九三六年一〇月、党としてはじめて、アメリカ生れの党员が多数を占めるに到ったのである。

もっとも、「工場に不拔の基盤をもつ」共産党の建設

は、この時期においても達成されなかったと言える。何故ならば、アメリカ共産党がまず始めに成功をおさめた分野は、失業労働者の組織化運動であったからである。一九三〇年に、共産党は六〇〇〇人の新入党员を失業労働者から迎え入れた。一九三三年にも新入党员の九〇%は、失業労働者であった。一九三六年になっても、党员の半分程度は、失業者であったと言われる。そのうえ、失業労働者の党からの脱落率はきわめて高かった。一九三〇年に入党した六〇〇〇人のうち、党员増加として記録されたのは、一〇〇〇人だった。一九三二年には一四〇〇〇人の新入党员が有ったが、実質的な増加は、四〇〇〇—五〇〇〇人であった。その結果、大量の党员拡大にもかかわらず、それは、「工場に不拔の基盤をもつ」党の建設に結晶化しなかったのである。そのために、共産党は、生産組織のいわば外側から党の主張を訴えて行く形になり、労働者の疑惑を買ったり、官憲の弾圧を受けたりすることが多かったと言わなければならないだろう。

とはいえ、一九三四年から一九三八年にかけて、共産党は、「工場に不拔の基盤を持つ」党の建設にある程度

成功したとみられよう。党員の粘り強い党員獲得活動や、いわゆるコロナイゼーションによって、徐々にではあれ、工場労働者党員が増加していった。この傾向は、一九三三年以降におけるニュー・デールの登場とそれに伴うアメリカ労働運動の高揚という文脈内において飛躍的に拡大されていった。

一九三三年以降、アメリカにおいて巨大な労働運動が創成されていった。この労働運動の第一段階は、労働者たちが地方的な組合をほとんど自然発生的な形で組織化したことであった。そして、かれらは、巨大独占に対抗してみずからの目的を達成するために、全国組織の結成を志向し、オルガナイザーを求めていったのである。このいわば第二段階において、共産党員の果たした役割は、きわめて大きなものであった。

一九三三年以降のアメリカ労働運動の高揚・発展過程におけるアメリカ共産党ならびに党員の貢献・機能に関しては、性急かつ丸ごとの価値判断は避け、細かい実証が必要になる。というのは、共産党の果たした役割とその形態は、いろいろな組織で千差万別だからである。たとえば、一九三四年のサンフランシスコのゼネラルスト

ライキ当時、生産現場に一人の共産党員もいなかったにもかかわらず、党支持を通じて、また、外部からストライキに密着して、ストライキ終了時には、多くの党員を持つにいたった港湾労働者の組織化もあれば、組織化の初期の段階からかなり多くの党員と支持者を擁していたUAWのような場合もあり、また、Steel Workers Organizing Committee におけるように、ジョン・ルイスによって採用されてオルガナイザーとして共産党員が組織化に参加したこともあったからである。

ところで、筆者は、先に「一九三四年から一九三八年にかけて、共産党は『工場に不抜の基盤を持つ』党の建設に、ある程度成功したとみられよう」と書いた。そこで、次に、アメリカ共産党の成功が、ある程度のものであったことの意味が明確にされなければならないだろう。N・グレイザーによれば、それは、専門職に従事する党員やホワイトカラーの党員が、労働者党員以上に急速に増加したからであり、更にはまた、共産党員が統制するようになった労働組合を、共産主義労働者の組合に転換することに失敗してしまったからに他ならない。

因みにN・グレイザーは、党員が二〇年代後半からみ

て約五倍にもなっているにもかかわらず、重要産業のカードルはそれほど増加しておらず、党の強さは、少数の例外を除いて、党の組織統制にその基盤をもっていたことを明らかにしている。更に、かれは、アメリカ共産党が、三〇年代を通じて、圧倒的に労働者を主体とした組織から約半分を中産階級の成員が占める組織へと転生してしまつた、と論述しているのである。とりわけ、ユダヤ人の知識人や専門職に従事する労働者に、党は根づよい基盤を持つことができた。つまり、ホワイトカラーの仕事や専門職、それに教職、社会福祉、司書といったような準専門職に従事した二世代のユダヤ人たちが、アメリカ共産党の全く新しい基盤を形成したのである。

アメリカ共産党は、大恐慌勃発当時、一九二八年のコミンテルン第六回大会の、いわゆる「社会ファシズム」論あるいは「第三期」論の立場に立って、あらゆる戦線で二重権力を作り上げることを目ざしていた。そのため、あらゆる分野において、アメリカ共産党は、孤高を保っていたものの、アメリカ社会とその生活にほとんど影響を与えることのできない勢力にとどまっていたのである。たとえば、労働運動の分野においては、共産党は二重組

合主義の立場をとり、保守的なAFLの外側に、革命的なTrade Union Unity Leagueを一九二九年に結成したが、TUULは、石炭、繊維、製靴などの分野で若干の成功を収めたとはいふものの、所属組合中最大と言われたNeedle Trades Workers Industrial Unionでも、五〇万労働者を雇用した産業で、約六〇〇〇人しか組織していなかったから、その「成功」の程度が知られよう。

その結果、アメリカ共産党は、大恐慌によって巷に投げ出された失業者の組織化に向つた。一九三〇年には、逸早くNational Unemployed Council (NUC)を組織し、全国的に失業者の利益を保護するために活動し(家主による家賃を払えぬ借家人等の強制立退きを阻止するなど)、一九三一、一九三二年の失業者の大行進、さらには、一九三二年の旧軍人のポーナスマーチを指導したのである。このような運動は、多くの失業者の信頼をかちえ、その後の共産党の諸運動の一つの重要な支持基盤となつていったと言えるであろう。

しかし、国際的には、ドイツにおけるヒトラー政権の誕生、また国内的には、一九三三年三月以降のルーズベ

ルト大統領によるニュー・ディール政策の実施とそれによるかなり広範な大衆的基盤の獲得という状況は、アメリカ共産党によりやくいままでの極左路線の限界、行きづまりを自覚させることになった。

このような状況のなかで、アメリカ共産党は、何とかしてその極左路線を克服しようと努力を開始した。一九三三年の三月末には、共産党は、AFLと社会党に対して共同行動を申し入れた。また同年には、共産党は、マステの率いる American Workers Party にも接近したし、更にはTUUL傘下の炭鉱労働者は、United Mine Workers に加入しようとした。以上のような努力は、社会党に色濃い反共主義と、共産党自体が未だ統一戦線を樹立していこうとする路線を確立していなかったことなどが大きくひびいて実を結ばなかったけれども、その後の共産党の新しい路線の端初としてきわめて興味深い。

政党間の統一戦線や労働運動における線一戦線の結成に先立って、アメリカでは諸々の統一戦線的な大衆組織が早くから形成された。一九三三年には、前年にロマン・ロランやアンリ・バルビュスによってアムステルダ

ムで組織された反戦国際会議をうけて、アメリカ反戦反ファシズム同盟が結成された。この組織は、共産党員(フォスターやD・ヘンダーソン)、社会党員(U・シンクレア、P・ハブグッド)、諸政治セクト、それに無党派リベラルなどによって準備され、第一回大会の準備段階でTUUL参加の可否をめぐって社会党系メンバーが脱落したものの、三〇年代を通じてもっとも大きな平和運動組織として大きな影響力をもった。その組織の最盛期には、四〇〇万人以上のメンバーが居たと言われている。

さらに、一九三四年には、アメリカ青年会議 (American Youth Congress) が出来た。この組織は、個人加盟を認めなかったので、社会党の青年組織 Young People's Socialist League、共産党の青年組織 Young Communist League や各種の宗教青年団体 (YMCA など) によって構成され、エレノア・ルーズベルトやニューヨーク市長ラガーディアの支持をも受けた団体であった。

一九三五年は、アメリカの左翼運動にとって、大きな転換点であっただろう。一九三四年の九月に再びAFL

に對して組織的統一を呼びかけたTUULは、その呼びかけが拒否されると、地方的な支部単位でTUUL傘下の組合をAFLに参加させていたが、一九三五年三月、遂にTUULを解消し、AFLへの加入を完了した。そして言うまでもなく、一九三五年の夏に開かれたコミンテルン第七回大会を契機に、アメリカにおいても統一戦線をめざす方向が、確固とした方針として確立されたのである。

周知のごとく、コミンテルン第七回大会は、ファシズムを阻止しファシズムを打倒するためには、労働者階級の統一戦線の結成が枢要であることを強調し、さらに「プロレタリア統一戦線をもとにして広範な反ファシズム人民戦線をつくり出すこと」が運動の急務であること明らかにした。本稿との関連において、われわれが留意しておかなければならぬものは、次の諸点であろう。まず第一に、第七回大会は、プロレタリア統一戦線とは一応区別されたものとして、「人口の大多数を占めている勤労農民および都市小ブルジョアジーの基本的大衆とプロレタリアートとの闘争同盟」という意味での人民戦線概念を定式化したことである。そして、第二に、デ

イミトロフ報告は、アメリカにおいては「労働農民党」の結成が、大衆的な人民戦線の特殊形態として有効であり、広範な勤労大衆をファシズムの魔の手から守る適切な形態であると定式化したことである。さらに第三に、以上のようなディミトロフの人民戦線の定式化は、アメリカでは「資本主義的反動、ファシズム、戦争に反対する労働者階級、農民、黒人、中間階級の連携」という形で受け止められたということであり、第四には、以上のような反ファシズム統一戦線は、決してファシズムを阻止するという防禦的な立場をだけ強調するのではなく、社会主義への転換をおこなってゆく一つのアプローチとして位置づけられたということである。

コミンテルン第七回大会以降、アメリカ国内においては、アメリカ共産党の統一戦線及び人民戦線をめざす活動が一段と活発になった。数回にわたる共産党と社会党のトップ会談が持たれ、また一部では、地方選挙における共闘関係を成立した。さらに大衆組織においても共闘態勢が進展し、たとえば一九三五年一月二月には、共産党系の National Student League と社会党系の Student League for Industrial Democracy が合併して、 Anne-

ican Student League が結成された。この組織は、構成員が二万人を越えたことがないと言われているが、一九三六年、一九三七年に学生たちの反戦ストライキを指導、組織し、反戦平和運動の重要な一翼をになった。また、この組織は、一九三〇年代以降に活躍する知識人たちの一つの精神的故郷としても重要である。その他、ここでは詳しく触れることはできないが、一九三六年には、黒人運動における統一戦線をめぐる National Negro Congress が作り出された。

一九三六年五月、アメリカ共産党は、ミネソタ州知事 Floyd B. Olson がリーダーシップをとっていたミネソタ労働党の呼びかけによってシカゴで開かれた労働党勢力の全国集会に参加した。この集会において共産党は、「進歩派や労働運動が圧倒的にルーズベルトの再選を支持しようとしているから、全国的な労働党を打ち出すためには機が熟していない」という決定に賛成した。このことは、コミンテルン第七回大会以来労働党建設を説いていたアメリカ共産党が一步後退を余儀なくされ、まず一旦進歩派や労働運動の統一を確立してゆこうとしたことを意味した。アメリカ共産党は一九三六年の大統

領選挙において独自候補を立てたが、これは決してルーズベルトに対決しようとするものではなかった。共産党は、ルーズベルトを支持することによってルーズベルトに反共攻撃がかけられることを心配して独自候補を立てたが、選挙戦では専ら共和党を攻撃することに終始したのだった。

言うまでもなく、共産党が一九三六年の課題を自由連盟や共和党に代表される反動勢力の打倒においたり、選挙においてルーズベルトを支持したりすることは、それ自体誤りではなからう。問題は、党自体の自律性を保ちながら進歩派や労働運動の統一を志向しえたのかということである。

一九三六年四月、ジョン・ルイスやシドニー・ヒルマンによって Labor's Non-Partisan League が創設された。この組織内においてはCIO系の組合が優勢であったが、AFLの組合も参加した。この組織の主要目的は、ルーズベルト再選にあったが、下部段階ではこの組織を踏み台として労働者政党の結成を望む人も多かった。実際に、自動車組合は、三六年夏の大会において労働党の創設を決議したし、またニュー・ヨークでは、Labor's

Non-Partisan League のニューヨーク支部として、American Labor Party が一九三六年七月に結成された。Labour's Non-Partisan League を踏み台として労働党を作ろうとする傾向は、一九三七年三月の第二回大会以降、より一層活発化したのである。

共産党はこの組織においても、当初は Labor's Non-Partisan League を踏み台として労働党を結成することに賛成であった。だがしかし、一九三七年四月になると共産党は、「人民戦線が労働党という形で純粋に成立することはないであろう。それは、民主党内外の進歩的運動という形をとるだろう」と主張するようになった。みられるように、ここには一九三五年当初の統一戦線あるいは人民戦線という概念は既になく、全国各地の労働運動、民主党、共和党の一部、その他の大衆組織を加えたいわゆる「民主戦線」(一九三八年)という概念にいま一步のところまで来ているのである。

ところで、CIO運動の当初からアメリカ共産党員は、その運動に個人として参加していたものの、アメリカ共産党がその指導を貫徹することができたAFL加盟の諸労働組合は、一九三七年春までAFLにとどまった。共

産党系の諸組合がCIOに加入して以後、共産党は、そのCIO内で左翼中央派ブロック建設のために努力した。このブロックこそがCIOを確立したものであり、コミンテルン第七回大会の統一戦線、人民戦線の具体化の努力であったのだろう。

しかしアメリカ共産党は、左翼中央派ブロックを形成することによっても労働者階級の統一戦線を形成することはできなかった。このブロックのなかで、アメリカ共産党は十二分に働くことができたのだろうか。答えは残念ながら「否」である。長らくCIO-Newsの編集をやっていたLen Deauxは、共産党はそれ以後遂に戦うことができなくなってしまったと書いているほどである。

〔B〕 諸セクト

一九二九年に創設されたCPLAは、主に失業者の組織化運動に力を入れ、各地にUnemployed Leagueを作り、さらにはNational Unemployed League(1933年)を作るなどして、その方面では一定の成功を収めた。しかし、CPLAの主要メンバーは、経済的破綻を中核とする内外のさし迫る社会—政治的状況のなかでは、そう

した成果には満足することができず、一九三三年十二月、アメリカ革命をめざす革命政党へとCPUSAを転換すべく American Workers Party を創設した。

AWPは、民主的な労働者評議会の設立を通じて社会主義を実現してゆこうとするマルクス主義政党たらんとしたから、すべての活動に政治的なオリエンテーションを持たせはしたものの、それによって大衆運動が飛躍的に発展したわけではなかった。大衆組織であるUL、NULはAWPが期待したような変わり方はしなかったし、そうした大衆組織から多くのAWP黨員が誕生するということも起らなかった。かえってCPUSAのAWPへの転換は、多くのオルガナイザーのエネルギーをNUL、ULからそらす結果さえ生じたのである。

マステたちは、NULやULが予想とは違って、革命にとって十分な基盤を提供しえないことを悟った。革命のためには、失業者たちの目先の直接的な要求だとか、救済希求意識 (relief consciousness) だとかが越えられなければならなかった。したがってAWPは、失業労働者が産業労働者と連帯する論理を追い求めた。その結果、AWPは、失業労働者が産業労働者のストライキ破りを

することなく、産業労働者のストライキを支援することによって失業労働者と産業労働者の連帯を確立してゆくという方式を確立していったのだった。

一九三四年二月二三日、AFL Federal Local Union 一八三四の四千人の労働者は、賃上げ、シニオリティ、組合承認などの要求を掲げてストライキに突入した。これに對して Toledo Electric Auto-Lite Company を中心とする企業側は、若干の賃上げは認めたものの残りの二つに關しては譲歩は有りえないという態度を示した。しかし、事態を憂慮した連邦政府の調停者は、賃上げ以外の問題はその後の交渉をおこなう機関を設置して四月頃に検討するとの調停案を提出した。その結果、四千人の労働者はこの調停案を受け入れ、ストライキを収拾した。

ところが会社側は、四月になっても交渉のテーブルにつくことを拒否した。そのためこの local は、四月十二日、ついに第二回目のストライキを決行した。第二回目のストライキは最初から、組合側に不利な状況のもとでおこなわれた。ストライキへの参加者は、被雇用者の約 $\frac{1}{4}$ しかなかったし、一八日には、各ゲートごとのピケッ

トへの参加者を二五名までとし、しかもこれまでピケットに参加し門を閉鎖するのに貢献していた *Lucas County League* (一) のリーダーシップを *AWP* が握っていた(二) のピケットへの参加を禁止するという裁判所の拘束命令が出されたからである。

以上のような不利な状況にもかかわらず、*Lucas County League* は直接行動をとることを決定した。五月七日、*T. Selander* と *Sam Pollock* との二人の *League* 指導者と数人の *AWP* 党員は、裁判所の禁止命令を破ってピケットに参加し逮捕された。その後、かれらはピケットをはじめないという条件つきで釈放されながら、そのまますぐにピケット・ラインにたった。その結果、以前にも増して多くの人びとが捕えられ裁判にかけられたが、裁判所はかれらを罰する適当な理由をついに発見することができず、再び多くの人びとがピケットラインに戻ることができた。

このような経過をたどって、はじめ負けそうだったストライキは、勇敢に戦われるようになった。ストライキは新しい段階に入り、何度か労働者と警察や警備兵との衝突が有り、六日間にわたる闘争で労働者二人が殺され

た。その結果、ついに労使双方で合意が成立し、労働者の側に輝やかなしい勝利が持たられたのである。

このストライキの勝利は、*AWP* の党員たちの革命政党を作ろうとするオリエンテーションをより一層強化する方向に作用した。かれらは *NUIL* を革命運動へと転化させる努力をつづけた。この努力は、*AWP* が一九三四年十二月に *トロッキスト組織* である *Communist League of America* と合併して *the Workers Party* を結成するという形で結晶化していった。一九三四年初頭には、*AWP* の党員たちは *トロッキスト* の理論的な *ドグマ* ティズムに対して強い懐疑の念を抱いていたのだが、*マステ* や *ニューヨーク支部* の知識人党員 *シドニー・フック*、*ジェームズ・バーナム* などの努力が、ついに両セクトの合併を実現したのである。

アメリカ・トロッキスト運動 は、*共産主義インターナショナル* 第六回大会以降、*J・P・キャノン*、*M・シャハトマン*、*M・エイバーン*らが *トロッキ* の思想に共鳴し *トロッキスト* になったところを出発点とする。*トロッキスト* たちは一九二八年一〇月、*アメリカ共産党* から除名され、一九二九年五月、*アメリカ共産主義者同盟*・共

産党左翼反対派を創設した。

共産主義インターナショナルと共産党の分派として何の大衆闘争もなしえない孤立の時期を経た後、共産主義者同盟は、一九三三年以降アメリカの労働運動の昂揚に遭遇することになった。トロッキストたちが持った労働運動とのかかわりのうちで特筆されるべきものは、一九三四年のミネアポリスのティームスターのストライキの事例である。

ミネアポリスは、ウィートや木材の集産地として、また交通の要所としてかなり古くから栄えたが、一九三四年の初頭まで、反組合の立場を表明する雇用者たちが完全に町を支配しているような、典型的なオーブン・シヨップの町であった。だが、一九三四年二月七日、International Brotherhood of Teamster ローカル五七四の炭鉱内労働者たちは、これまで市を完全に支配してきた反組合の立場に立つ雇用者たちに向けてストライキで立ち上り、三日間ストライキを打ち抜き、後に「飛ぶ軍団」(ストライキ本部の司令に従って自由に移動できる動くピケットシステムのこと)としてCIO運動で一般的に使われるようになったストライキ戦術の原型をあみ

だすなどして、ついに組合承認を獲得するところまで行きついた。このストライキでとりわけ指導的な役割を果たしたのは、三人のダン兄弟とトロッキストのカール・スログランド(Karl Skoglund)であり、この組織は組織化キャンペーンをつづけ、五月までには三〇〇〇人の新メンバーを獲得したといわれている。

雇用者たちは形式的な組合承認を約束したものの、実質的には組合と交渉する意志さえも持っていなかったことが次第に明らかになった。そこで一九三四年五月十五日、第二回目のストライキがはじまった。ストライキは、ミネアポリスの大部分の労働者や農民団体によって支援され強力に展開された。これに対して雇用者側も、小企業主、経営者、右翼、警察権力などを結集して何とかこのストライキを失敗に終らせようと画策した。戦いは、双方に多くの負傷者を出すほど激烈をきわめた。そのために、州知事と連邦政府の調停者が一種の調停案を提示することになり、戦いは沈勢化の方向に向った。

この休止期間に雇用者側は、IBTの組合長トビンのローカル五七四批判を巧みに使いながら、多くの新聞、ラジオを使って、この組合が共産主義者によって支配さ

れているとの宣伝を強化した。

ストライキは一九三四年七月五日に再開された。ローカル五七四はより完全なストライキ組織をつくると同時に、発行二日目にして発行部数一萬部を越えるストライキ日刊紙を発行して結束を固めた。こうした過程において共産主義者同盟のJ・P・キャノン、M・シャハトマンらの果たした役割はきわめて大きかった。

最初の数日間は比較的平穏だったものの、ストライキは、一九三四年七月二〇日警官が労働者に発砲して二人が殺され多数が負傷する事件が起って以来、凄惨をきわめた。しかし労働者たちはこれにひるむことなく、五万から一〇万人の参加するデモを組織し、雇用者たちを一段と窮地に追い込んでいったのである。

事態がこうなったところで、ミネソタ州知事F・B・オルソンは戒厳令を発令してストライキに割って入ろうとした。しかし労働者たちはピケをつづけたため、州知事はストライキ本部を占領し、ストライキ指導者たちを逮捕してしまった。

大部分のストライキ指導者が逮捕されてしまったにもかかわらず、労働者たちは団結をかためより一層ピケッ

トを強化する動きを示した。そのために州知事はもうそれ以上ストライキへの介入をすることができず、ストライキ指導者を釈放することになった。

ミネソタの労働者たちは、どのような攻撃に対しても団結の輪を拡げることによって答えた。そのためにストライキ再開後一ヶ月たって、雇用者側はついに譲歩する以外にストライキを收拾する手だてを見出しえなくなってしまったのである。闘争は労働者側の完全な勝利に終わった。

共産主義者同盟は一九三四年にAWPと合併してWorkers partyを結成したが、一九三六年になるとその労働者党を解体して社会党に個人の資格で参加してゆく戦術をとった。しかし約一年後、全員が社会党から除名されると、今度は社会主義労働者党を名乗って活動をつづけた。そして一九四〇年、党の組織問題とソビエト国家の性格規定(労働者の国家か官僚制的集産主義国家か)問題をめぐって分裂をおこし、大部分の労働者党員は社会主義労働者党に残ったものの、知識人党員、学生党員は・シャハトマンを党主にして労働者党(The Worker's Party)を結成していったのである。

〔C〕CIO運動

一九二九年の大恐慌以来久しく困窮の状態におかれていたアメリカ労働者階級は、一九三二年頃からようやく、自らのおかれた悲惨な状態から脱出するための努力をはじめた。全国各地で自然発生的にストライキがおこなわれ、また多くの左翼勢力は、何とかしてこのようなストライキを労働者の組織へと結晶化させようと努力したのである。

恐慌によって苦しめられ、みずからの状態を何とかしなければと考え始めたアメリカの労働者たちの間には、いわば潜在的な戦闘ムードがただよっていた。この潜在的ムードは、一九三三年のNIRA 7(a)の成立によって一挙に顕在化され、アメリカ労働者階級は「組織の噴出」(I・バーンシュタイン)現象を作り出していったのである。以前にも増してストライキが多発し、一九三四年にはトレド、ミネアポリス、サンフランシスコという三大ゼネストが闘われ、これらの大闘争はアメリカの労働者間に、労働組合創設の意志を不動のものとして植えた。こうした組織化とその組織を通じての自分達の問題の解決というアメリカ労働者階級の選びとった基

本方向は、当然、従来反組合の牙城と言われた自動車産業や鉄鋼業にも徐々に浸透していったのである。

アメリカ労働運動の再興に対して、AFLは古い職能別組合に固執したためにほとんど有効な対応を示さなかった。当時のアメリカ労働者階級の状態および運動を冷静に見極め、それに産業別組合を通じての大量生産方式産業の組織化をおこなうという基本方針を与えたのは、従来の運動の経験から産別ないし準産別という組織形態をとるようになっていたUMWのジョン・ルイス、ITUのC・ハワード、ACWのS・ヒルマン、ILGWUのD・ダビンスキーらであった。

AFL内の産業別組合を信奉する努力は、一九三五年度のAFL大会で一敗地にまみれた後、一九三五年十一月九日、正式にCIO (Committee for Industrial Organization) を発足させた。J・ルイスが委員長になり、書記にはC・ハワードが、また組織化担当の直接的な指揮官には、ルイスのかつての政敵でBrookwood Labor Collegeの指導者の一人であったジョン・プロフィーが就任した。CIOは、大量生産方式の未組織労働者を産業別労働組合に組織化することを目的とし、AFLとの

関係で言えば、AFLの組織化政策の現代化を促進し、AFLの政策を当時の産業状況下にある労働者の要求に合うように変革することであった。

発足当初CIOは、未組織労働者を組織化し、かれらをAFLの旗の下におくことを意図していたが、W・グリーンへの指揮下にあったAFLは、このCIOに対してきわめて強硬な態度をとった。AFLは、CIOが二重組織であると断定し、それを解散するよう要求した。しかし当時のアメリカ労働者階級の要求と適合的であったCIOは、CIOの指導者たちの意図をも越えて加速度的に発展していった。AFL指導部のとった冷たい態度と、せきを切って流れ出した労働者階級の巨大なエネルギーとが、CIO運動を完全にAFLの枠を越えるものにしてしまったのである。CIOは、次第次第に、AFLに対するライバル・フェレレーションを形成する方向に動いていった。

一九三六年十一月一六日からタンバで開かれたAFLの大会には、CIOに結集する大部分の組合は代議員を送らなかつた。そのため大会では、CIOの活動を停止させるといふ決議がほとんど何の抵抗もなく通過した。

だがしかし、そうした決議は何の意味も持たなかつた。何故ならば、CIOは各産業別組合においても、市や州単位の労働組織においても、確固とした地歩を築きつゝあつたからである。折も折、反組合の牙城であつた自動車産業と鉄鋼業において、きわめて重要な組織化のための運動が展開されつゝあつた。自動車産業の労働者たちは、一九三七年二月、GMの心臓部プリント工場において坐り込みストライキを成功させ、はじめてGMの組織化に成功した。また鉄鋼業においても、一九三七年三月、J・ルイスとタイラーの会議で、USスチールの組合結成が承認されるに至つた。このような二つの重要な組織化に成功することによつてはじめて、CIOはAFLに見劣りのしないライバル労働組合に成長したと言える。CIOは、一九三七年一〇月、第一回の全国会議を開き、AFLから独立した産業別組合の連合体として発足するための準備をすすめると同時に、AFLとの統一交渉を開始することを決定した。そして、一九三七年十一月、CIOは名称をCongress of Industrial Organizationに変え、第一回目の年次大会(創立大会)を開催したのであつた。

CIOに結集したさまざまな新しい産業別組合の組織化には、われわれがこれまでに見てきた諸類型の知識人がきわめて重要な貢献をした。先にも書いたように、J・ルイスがCIOの組織化責任者に Brookwood Labor College の重要メンバーの一人であったJ・ブローイーを起用し、またオルガナイザーとしても、この College 出身のC・ゴールドデンらを登用したこともあって、Brookwood Labor College 出身の労働知識人ならびにその思想は、CIOとその傘下の産業別組合にとってきわめて大きな貢献をした。多くの組合がその組織化ならびに組合運営に際して Brookwood Labor College 発行のパンフレットその他を利用したと言われている。

政治左翼のなかでは、共産党がもっとも大きな影響力を誇った。当時の数多くのストライキの約九〇%は、何らかの形で共産党との関連を持っていたと言われている。たとえば、UAWの組織化にとって決定的なものになったGMフロント工場の座り込みストライキの場合、W・モーター、B・トラヴィスなどのオルガナイザーや、組織化に際して重要な武器になった Flint Auto Worker 紙を編集したH・クラウスのような知識人は、共産主義

を信奉していたし、それにショップ・ステュアートとして労働現場に密着して下から運動を盛り上げていった共産党員はかなりの人数にのぼり、きわめて重要な役割を果たした。さらにUEの組織化は言うに及ばず、鉄鋼業の組織化においても、共産党は重要な役割を果たした。W・フォスターによれば、SWOCが雇った二〇〇人のオルガナイザーのうち約六〇人程が共産党員だったという。

社会党とその同調者も一定の影響力をもった。CIOのオルガナイザーとして、D・Hapgood やL・クルチスキ、A・ガーマーなどが活躍した。組合別では、UAW、鉄鋼、繊維、IUMSW、ゴムなどの組合で一定の役割を果たしたとみなければならぬ。

その他、トロッキスト以下の諸政治セクトも決して小さくない役割を果たしたとみなければならぬ。とくにトロッキストは、チームスター内において無視することのできない影響力をしばらくの間保持したのであった。

〔D〕 プロレタリア文学運動

人びとは、ごく一般的に、一九二〇年代から一九三〇年代にかけての作家の存在様式の変化を、「逃避」から「公的生活への介入」という形で総括する。これは決し

て誤りではない。しかし、ここでわれわれが注意しておかなければならないことは、こうした変化が大恐慌による生活基盤の喪失の結果としてだけ位置づけられはしないということである。というのは、作家がプロレタリア文学理論を求め、さらには社会とのかかわりを追求するといった傾向は、大恐慌以前にはっきりと看取される(たとえばサッコロ・バンゼッティ事件の際の知識人の動きをみよ)からである。大恐慌は、こうした新しい端緒を決定的にしたものとして理解されなければならないだろう。大恐慌は、ヘンリー・アダムズや J・J・チャップマンを文学上のヒーローからひきずりおろし、かわって F・フランクフルター、ジョン・リードをそのヒーローの座に送ったのである。

その一人のヒーローの名前を冠したジョン・リード・クラブは、一九二九年ニューヨークで設立された。ジョン・リード・クラブは、当時アメリカ共産党が自己の文化政策遂行のため、あるいは大衆の教育機関として設立した「労働者文化連盟」の一環をなすものであり、さらに詳しく言えば、「労働者文化連盟」の一翼を担う「革命的作家連盟」の一重要組織であった。「革命的作家連

盟」は十一の団体によって構成されていたと言われているが、その大部分は英語以外の外国語の団体であったので、ジョン・リード・クラブは「労働者文化連盟」の重要なプロバガンダ機関として、次第次第に重要な位置を占めるようになっていった。ジョン・リード・クラブはニューヨークにその中心をおきながらも、一九三四年には全米で一二〇〇人の会員を数えるまでになっていった。

言うまでもなくアメリカ共産党は、一九二九年当時、スターリンの指導するコミンテルンの方針通り、あらゆる分野の活動において、いわゆる「二重権力」状態を作り出すことをその目的としていた。文化の問題に関して言えば、「大衆をいつまでも幼児にとどめておく」資本主義文化の存在を確認し、それに対抗して労働者の文化を確立することこそが、緊急の課題だといっているのである。

以上のような基本路線ののちとって、一九三〇年、三〇年代のプロレタリア文学運動の指導者の一人であるマikel・ゴールドは、ジョン・リード・クラブの機関誌 *New Masses* に、「作家のための新しいプログラム」と題するジョン・リード・クラブのための活動方針を発表した。この文書によれば、ジョン・リード・クラブに結

集する作家たちは、①一つの産業に数年間とどまり、そのエキスパートになり、そのインサイダーとして産業の状況を描けなければならず、②情宣活動などに主体的にかかわり、真実なるものに根をおろす必要がある。その結果、③全国の作家集団は、産業における通信員となり、アメリカの全企業における文化戦線からの報告が可能となり、④そのためには、機関誌 *New Masses* は、産業を基盤とする労働者階級の意見発表の場とならなければならぬ。

またメンバースhipの側面から見た場合、当時のジョン・リード・クラブは、いわゆる厳密な意味でのプロレタリア文学者だけをその会員とした。つまりきびしい思想教育を経た少数のプロレタリア文学者だけしか、ジョン・リード・クラブの会員に成ることはできなかった。それもそのはずで、先のような基本方針を実行しうるのは、ごく少数の筋金入りのプロレタリア文学者をおいて他にないからである。その結果、ジョン・リード・クラブは、当初の期待に反して、次第次第に広範な作家や読者層から孤立していった。

マイケル・ゴールドがジョン・リード・クラブの活動

方針を指示した数カ月後、「革命文学国際ビューロー第二次世界大会」がロシアのクラコフ (Khar'kov) で開かれた。この会議は、スターリン時代の文化的な「極左冒險主義」の頂点をなすものにふさわしく、各国の作家たちに戦争とファシズムに対して反対すると同時にソビエト・ロシアの擁護者になることを求め、更には「社会ファシズム」に対しても妥協のない闘争を組むことを要求した。

このクラコフ会議には、アメリカからマイケル・ゴールド、A・B・マギルを含めて六人の代表が参加した。この六名のアメリカ代表の参加は、その後のアメリカの文学者の運動にとって大きな意味を持つことになった。何故ならば、この会議はアメリカ支部の運動に関して一〇項目にわたる特別決議を採択したからである。

アメリカに関する決議の要点は、*New Masses* の政治的妥協の欠如を批判し、運動のなかに新しいプロレタリア分子を注入する必要があるということであった。決議は、黒人大衆内の文化活動の不足、マルクス主義的批評への無関心を指摘し、「全ての言語による文化団体」の全国的規模の組織編成、労働者との接触の緊密化、各地

方のジョン・リード・クラブ及び外国の革命的文化団体との連絡の強化、大衆に対する情宣活動の活発化を要請した。要するに *New Masses* の最大の任務は、「全ての点において、全国の階級意識に目覚めた労働者及び革命的知識人の文化的組織」化への努力を傾注することであると云うのである。

この会議以降、*New Masses* は闘争方針、運動方針の明確化をいそいだ。クラコフ会議以前には、「フエロートラヴェラー」やシンパサイザーはジョン・リード・クラブの会員になることはできなかったが、会議後は、かれらが再教育の結果プロレタリア陣営に加わる見込みが有るならば、かれらの入会は許可されることになった。その結果ジョン・リード・クラブは、二〇年代における社会からの「逃避」を克服して「公的生活」へと介入してきた「目覚めた知識人」を獲得して、徐々にではあれ、その影響力を強めていたのである。

ところで、一九二九年以来の大恐慌という社会的危機のただ中におかれたアメリカの作家たちは、まずはじめにその危機における自分達の役割が如何なるものであるかを明確化する必要性に迫られた。かれらは、作家と社

会の関連に関する従来の觀念に固執することはできなくなり、何としても自らの存在証明をする必要性を感じていたのである。そして、多くの作家たちは、自分たちの大恐慌以前の態度や活動を批判するところから、その作業を開始した。

たとえばこの作業の代表例の一つとして、われわれはエドモンド・ウイルソンの *Axel's Castle* (1931) をあげることができる。本書のなかでエドモンド・ウイルソンは、過去半世紀にわたる文学を支配しつづけてきた方法や仮定を、シンボリズムであると規定した。彼によればこのシンボリズムは、文学における古典主義や自然主義に対する反応だけではなく、西欧における中産階級の覇権に対する反動でもあった。多くの作家たちはブルジョアジーの権力を打破することが不可能であると思いつき、あらゆる社会的かかわりから身を引いて、科学、テクノロジー、利潤の力によって侵蝕されない私的な感覚の世界にとじこもった。その結果、書くことだけが唯一の意味有る行為とみなされ、また芸術だけが宇宙への唯一の鍵とみなされるようになった。このような立場から書かれたものが、シンボリズムの文学というわけであ

る。

もちろん、このシンボリズムは、ウイルソンにとって全否定されるべきものではなかった。シンボリズムは、少なくとも人間の自己自身に関する知識を拡大してくれたいと言えるだろう。だが、シンボリズムの逆機能は測り知れない。たとえば、詩を詩人の全く個人的な関心事におしとどめることによって、詩自体が読者にさえも伝達不可能なものになる傾向を作り出したし、さらには個人的な感情や内的な存在状態にもっぱらかかわり合ったことによって、ブルジョア文化の大前提である個人主義の前提をかえって強化したのである。

ウイルソンによれば、もしも作家たちがこのシンボリズムにひたりきったとするならば、かれらに残された道は二つしかない。一つは、ますます自己の個的世界にとじこもり自己の私的な幻想を蓄積してゆく道である。そしてもう一つの道は、「もっと原始的な文明に、つまり如何なる芸術をも必要としない単純な生存の問題のみが緊急の課題となる文明に逃避することである」。だが、「幸運なことに」とウイルソンはつづける。この二つの道は、現実の世界の出来事によってその行手を閉ざされ

てしまった。恐慌と社会主義の実験は、知識人たちにも一度人間社会で成功する方途を探求する機会を与えてくれたのである。

以上のようなウイルソンの過去の文学活動批判は、その形態や細部は種々異なるにせよ、マルコム・カウリーの *Exile's Return* における同様の試み及びその結論とほぼ一致するものであった。要するに知識人は、ストライキやデモンストレーションや政治や生活に首を突っこむことによって始めて、自己のヒューマニティを回復することができるといのが、ウイルソンやカウリーのコンセンサスであり、いや三〇年代の多くの知識人のコンセンサスであったのである。こうしたコンセンサスがあってはじめて、三〇年代に大量の知識人が左傾化したのである。

実際一九三〇年代の作家たちの「左傾化」は、きわめて急激、根底的なものであった。一九二〇年代のサッコ・パンゼッティ事件につづいて、一九三〇年のガストニアにおける紡績工場の大ストライキ、一九三一年のハーラン(ケンタッキー)における炭鉱労働者のストライキなどに、多くの知識人が何らかの形で参加した。とくに後

者の場合、その労働争議の支援、調査のために「ドライザー委員会」が組織され、委員長ドライザーの下にジョン・ドスパソスやチャールス・ラムフォードらが参加して、活発な活動を展開し、知識人の社会参加をより一層促進することになった。

このような知識人たちを現実的基盤として、*New Masses* は、一九三一年二月、クラコフ会議におけるアメリカに対する一〇項目決議にこたえようとして、広範なプロレタリア文化運動推進決意をおこない、六月には文化団体の全国統一組織の結成を計画し、さらに八月に「労働者文化連盟」の基本方針を発表したのである。この「労働者文化連盟」の基本方針は、プロレタリア文化の発展可能性が恐慌によって急激に増大しつつあることを認識し、この状況のなかで芸術を武器として、その文化の確立のために闘おうという決意表明であった。

以上のような運動の成果も手伝って、多くの知識人の間で政治活動に積極的に参加しようとする意志が共有されるようになり、また共産主義や共産党に対して肯定的な姿勢をとる人が多く現われた。このことは、*Modern Quarterly* が一九三二年におこなった「アメリカ作家は

何処へ行く」というアンケートや *New Masses* の「私は何故共産主義者になったか」というシンポジウムにはっきりと現われている。たとえば *Modern Quarterly* のアンケートにおいて、社会的危機に対して知識人のとるべき立場を問われた作家たちは、「搾取集団のために報酬をうけて宣伝活動をしているような人たちを除いて、どのような作家たちもごく自然に生産者とのきずなを見するだろう」(J・ドスパソス)とか、「作家たちは、社会的危機に意識的に、知的に、しかも積極的に参加しなければならぬ」(グランヴィル・ヒックス)とか答えている。さらに「共産主義者になることによって、芸術作品が深まると思っているか」と質問されて、「はい」(シャールウッド・アンダーソン)、「私は、共産主義者になることが、芸術家の仕事を常に深めるべきであると考えているし、事実また大抵の場合そうなのです」(グランヴィル・ヒックス)などと答えているのである。またここできわめて興味深いことは、多くの作家たちが共産党に対比して社会党を厳しく批判していることである。ジョン・ドスパソスは、現在社会党員になることは、ちょうど代用ビールを飲んだのと同じ程度の効果しか得ら

れない」と言い、マルカム・カウリーは「共産主義者の哲学は、社会主義のそれよりもより活動的であり想像力の刺激となる」と評論し、またグランビル・ヒックスは、現在社会黨員になることはブチブル階級に加担することになり、「社会主義には基本的な誠実さが欠けている」とまで言っている。

一九三二年五月、ジョン・リード・クラブは、その第一回全国代表者会議をシカゴで開いた。会議は、①組織問題、②中産階級知識人の問題、③「新しい種類の文学を創造するために、信頼することのできる労働者階級を訓練することと、中産階級知識人を共産主義へ獲得することをどう調和してゆくか」の問題等をめぐって対立を含みながらも、「ジョン・リード・クラブ宣言草案」(Draft Manifesto of John Reed Club)を採択した。この宣言は、資本主義と資本主義文化を厳しく批判しつつ、その崩壊過程からソソ同盟における社会主義社会とその文化の建設によつてはげまされながら幻想を取り払われた大量の中産階級知識人が生成されていることを指摘し、かれらが、中核としての労働者階級の革命的文化運動と連帯して、クラコフ会議で打ち出された基本方

針ののつとつて活動することの重要性を強調したものである。言うなれば、この宣言は、一九三〇年のクラコフ会議以来のアメリカ文学運動の一つの総括の性格をもっており、その総括にもとづいてクラコフ会議で打ち出された方針をより一層徹底させることを意図したものである。政治運動の面でも、同じ五月に「フォスター及びフォードのための専門家会議」が結成され、エドモンド・ウイルソン、ドス・パス、シャールウッド・アンダーソン、マルカム・カウリー、シドニー・フック、グランヴィル・ヒックス、マッシュュー・ジョセフソン、ルイス・アダミック等々が参加した。この会議は、その他の知識人に対する「公開書簡」を作成し、その中で「われわれは労働者の党と行動を共にしている……現在の経済体制における混乱、とてつもない浪費、惨状、これらに抗議する唯一の方法は、共産党候補に投票することである」と主張した。このような動きに対して、共産党書記長アル・ブラウダーは、「この国の知識人の最高峰がこのような形で労働者の運動に参加したことは、知識人の間に真の精神的革命がおこりつつある兆候である」とまでいっている。そして、一九三三年にアメリカがソビエトを承認

してからは、アメリカ知識人たちは、以前よりもはるかに容易に政治運動や共産主義とのかわりを持つようになっていったのである。

一九三二年の全国組織の確立後、ジョン・リード・クラブは、労働者階級の革命的な文化運動の面でもそれなりの前進をみせた。会議以後、多くの支部が設立され、多くの戦闘的なプロレタリア雑誌が創刊され無名の小説家や画家の作品が紹介された。ジョン・リード・クラブのすべての活動のうちでとりわけ重要なものは、このクラブが才能豊かな黒人や社会的に虐げられた人びとの創作活動をあたたくはげましたということである。このような活動のなかから、黒人作家リチャード・ライトなどが育ってきたことは有名である。

さて、アメリカ文学運動は、一九三四年秋頃からもう一つの転期を迎えることになった。すなわち、一九三四年九月、ジョン・リード・クラブは、シカゴでコンフェレンスを開き、過去二年間の運動の前進をたたえると同時に、左右両翼への偏向とセクト主義を批判し、運動前進のためにより一層大胆な方法を採用する必要性を確認した。この一層大胆な方法とは、具体的には、コンフェ

レンスから六ヶ月の間に全国的な作家会議を創設することであった。

一九三五年一月、*New Masses* は、「アメリカ作家会議の呼びかけ」を掲載した。この呼びかけによれば、当時の作家の関心は、戦争とファシズムに反対する政治闘争をどうすすめるかということと、アメリカを革命的な文脈において文学的にどう表現するかという二点であった。呼びかけは、こうした二点に関心を寄せるすべての作家が集まって議論をし、「アメリカ作家同盟」を作ろうというのである。

呼びかけの主旨とは異なり、会議への招待は、信頼できる作家だけに限定され、しかもトラクテンバーグを中心とした慎重な準備会を経た後に、第一回アメリカ作家会議は、一九三五年四月二六日、二七日の両日ニューヨークで開催された。会議はワルド・フランクを会長に選び、文学と社会が密接不可分の関係にあることを確認しながら、文学や文化を過度に政治主義的なイデオロギイ的図式によって裁断しないことの重要性を強調する報告がつづいて成功裡に終了した。コミンテルン第七回大会のデイミトロフ報告がおこなわれたのは、この数ヶ月

後のことだが、この会議は、アメリカ文学運動における
 デイミトロフ報告の先取りといつてよいだろう。

それでは「アメリカ作家同盟」はどのような活動をおこなったのだろうか。戦争とファシズムという悪から文化を守る闘いの一環として、同盟は、一九三五年六月、パリで開かれた第一回文化擁護のための国際作家会議へマイケル・ゴールドとワルド・フランクを派遣した。また一九三五年の冬から一九三六年の春にかけて、同盟は「アメリカの心」と題する講演会シリーズを企画し、大衆の啓蒙につとめたりもした。

文学と社会や政治を結びつける努力として、同盟は、一九三五年六月一七日、「政治犯擁護全国委員会」とともに、グランヴィル・ヒックスが大学を解雇されたことに對する抗議行動に立ち上った。また同月、同盟はキューバに使節団を送り、バチスタ政権の牢獄の状況やキューバ内政におけるアメリカ大使の役割などについて分析を深めようとした。さらに何人かの作家たちは、アラバマのダウンス法（左翼雑誌を一部以上所持していた場合、最高一〇〇ドルの罰金と六ヶ月の禁固に処すというもの）を身をもってテストするために、アラバマに出かけ

ていったりもしたのである。

一九三六年春以来、同盟の活動は停滞気味だったと言われている。そうしたなかで一九三六年夏におきたスペインの内乱は、多くの作家の反ファシズム感情を一気に高め、何人もの作家がアブラハム・リンカーン旅団に参加した。また、一九三六年一月には、カリフォルニアで西部作家会議が開催され、二五〇人程の作家が集まったといわれている。しかし、こうした盛り上りも、モスクワ裁判によって破られてしまったのである。

一九三六年にはじまって一九三七年の終りまでつづいたモスクワ裁判は、アメリカの作家たちに多大な影響を与えた。たとえばジェームズ・ギルバードによれば、裁判の正当性を主張しその手続きを弁護したマルカム・カウリーでさえも、そのニュースを聞いた際には「心臓がとまったような気がした」という。

モスクワ裁判は人びとにソビエト共産主義に対する疑惑を植えつけ、また多くの人びとは共産党の文化政策に對しても深い懷疑を抱くようになった。その事件を契機にして文学運動から身をひいた文学者たちはさておくとして、その事件に触発されてアメリカの文学運動のなか

にソビエト共産主義—アメリカ共産党系の文学運動とは異なった一つの文学運動がはっきり形をとりはじめたことに、われわれは注意しておかなければならない。それは、ソビエト共産主義批判の手がかりを与えてくれたトロツキーの思想を信奉する文学運動であった。この運動を代表する人物としては、ジェームズ・T・ファレルやドワイト・マクドナルドらをあげることができる。

一九三六年、哲学者ジョン・デューイを委員長とする「トロツキー防衛アメリカ委員会」が結成された。この委員会は、トロツキーのために安全な亡命を確保するよう努力し、また実際にトロツキーに会って、彼がファシスト勢力と通じたとする非難や反逆罪に問われていることに対する弁明を聞くなどの活動をした。その委員会に参加したのは、一九三四年の共産党の社会党襲撃事件以来共産党に批判的であった知識人、共産主義者同盟やその周辺につくられた諸団体に参加していた知識人たちであった。

第二回アメリカ作家会議は、一九三七年六月に開催された。この会議への呼びかけは、当時の状況が第一次世界大戦前の文学上のルネッサンス運動やランドルフ・ボ

ーンの青年連盟運動を生み出した状況と類似していることを指摘すると同時に、そうした運動が戦争によって崩壊させられてしまったことに注意を喚起した。要するに、この呼びかけは、アメリカにおける政治や文化におけるルネッサンスを、ファシズムの魔の手から守ることを主張したのである。

第二回会議には、前回よりもかなり多数の既成の有名作家たち—たとえば、アーネスト・ヘミングウェイ、アーチバルド・マクリーシュ、パン・ワイク・ブルックス、アースキン・コールドウェル、アプトン・シンクレア—が参加した。会議では、彼らの到達点が人民戦線であることと位置づけられ、共産党書記長アール・ブラウダーは「いまの時代における最も偉大な文学は、必ずや、次のことを、つまり、現在人民の間で進行中の幅広い民主戦線の構築とファシズム打倒をめざした偉大な過程の芸術的再創造ということをしつかりと心底に据えたものになるだろう」と演説した。

会議は、グランヴィル・ヒックスが主宰した「職業別委員会」でトロツキズムをめぐる若干の混乱があっただけで、成功裡におわった。これ以後、連盟は一段とル

イズベルト政権に接近し、会員数も増加して、その影響力は一九三九年夏にピークに達した。しかし連盟の魅力であった反ファシズムという立場が、独ソ不可侵条約の締結によって消滅してしまうと、急激にその影響力を失ない、自壊してしまったのである。

〔E〕 結びにかえて—知識人の疎外

アメリカの四〇年代は、知識人の疎外の時代である。多くの共産党員知識人は、独ソ不可侵条約の締結によって衝撃的な打撃を受けて離党していった。しかし、共産党員数のピークは、その条約の締結時よりも後にくるのであるから、この動きはきわめて知識人的なものであったと言ふことができる。社会党は、三〇年代には多くの派閥抗争を経験しながら、党を左翼的に純化していった。その担い手の多数は、知識人党員だったと言えるだろう。しかし、党の左翼的純化が頂点に達したとき、社会党はそこに大衆を見出すことができず、自壊していった。またトロッキスト運動は、四〇年の大分裂によって、一方の労働者大衆を中心にした社会主義労働党と知識人や学生を中心とした労働者党に分裂してしまつた。

三〇年代に、労働知識人たちは、CIO運動において

積極的な役割を果たした。しかし、CIOが確立されてしまつと、かれらは、CIOのリーダーシップを担う人びとの知的手段としてのみ存在することを許され、その知識人性を放棄せざるをえなくなつてしまつたのである。文学運動も独ソ不可侵条約の締結以後自壊の道をたどつてしまつた。その主要な原因の一つは、文学運動が政治に従属させられ、内在的な発展を遂げえなかつたといふことにある。

〔付記〕 98巻1号において、本論文の注は(下)において一括して示すことを約束しておいたが、本文が大幅にふくらんでしまつて、注をつける余裕を全く失つてしまつた。そこで本稿の主要参考文献を一括して示すことにより注の代わりとしたい。不手際を読者におわびすると共に寛容をお願いする次第である。本論文を注を復活した形で発表する機会を近い将来に作るようにしたいと考える。

参考文献

- George Rawick, "A New Look at the New Deal," *New Internationalist*, vol. 24, Nos. 2—3, Spring-Summer 1958.
 J. O. Morris, *Conflict within AFL*, Cambridge University Press, 1958.
 Brian Peterson, "Working Class Communism," *Radical America*, vol. 5, No. 1, 1971.
 Irving Howe and Louis Coser, *The American Communist party: A*

Critical History, Preager Paperbacks 1962. Nathan Glazer, *The Social Bases of American Communism*, Harcourt, Brace 1961. Irving Bernstein, *The Turbulent Years*, 1933—1941. Houghton Mifflin, 1970. Art Preis, *Labor's Giant Step*, Pathfinder Press, 1972. Len Decaux, *Labor Radical*, Beacon Press 1970. Farrell Dobbs, *Teamster Rebellion*, Nomad Press, 1972. Daniel Aaron, *Writers on the Left*, Avon Library, 1969.

James B. Gilbert *Writers and Partisans*, John Wiley and Sons 19630. Irving Dewitt Talmadge ed., *Whose Revolution*, Howell, Soskin Publishers, 1941. 樋口秀雄「三〇年代におけるアメリカ知識人の動向」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所)第五卷第2・3号一九七四年。

(一橋大学教授)